

現代短歌分類辭典

別名現代短歌總索引

第 二 十 卷

津 端 修 編 纂

津 端 修 編 纂

現代短歌分類辭典

第 二 十 卷

現代短歌分類

20

限定版1,000部の内

No.

昭和四十四年二月二十三日発行 定価四五〇円

著者発行
兼印刷者

津
端
修

東京都中野区上高田二丁目九の一六

発行所

津
端
修

振替 東京六七三四一番
電話 三八七局八四二九番
郵便番号 一六四

目次

あだたら風	一	歌数	一	頁数
あだたらの山	三		〃	
あだたら真弓	一		〃	
あだたらまわた	一		〃	
安達太良山	九		〃	
足立	一		二	
安達が原	五		〃	
足立の山	一		三	
足立姫	一		三	
足立群山	一		四	
安達めの子	一		〃	
あたつ国	一		〃	
あたつて	六		〃	
あたつてゐる	四		五	
婀娜と(あだと)	一		〃	

敵共(あだども)	二	歌数	二	頁数
仇名	五		〃	
仇なさけ	一		〃	
あだ名しゝて	三		七	
あだなする	一		八	
あだ名せゝし	一		〃	
あだなふ	一		〃	
仇波	二		〃	
あだならゝず	二		〇	
仇なりゝき	一		〃	
あだなりゝし	三		〃	
あだなる	九		二	
あだなれ	二		三	
阿旦(あだに)	一		〃	
あだに	七		〃	

婀娜に（あだに）
 あだの
 阿多海
 阿多君
 能はーざりーける
 あたはーざる
 能はーず
 仇花
 能はーぬ
 能はーねーば
 価（あたひ）
 あたひしーぬーべき
 あたひす
 あたひすーべき
 値する
 値せーぬ
 仇びと

二五 一 一 一 三 一 七五 一 四 八 一〇 七 一 一 二 二 一

〃 〃 六 〃 〃 五 〃 〃 六 七 六 〃 〃 〃 五 〃 四

あたひ無さ
 与ふ
 能ふ
 あだぶし
 あたふた
 あたふたと
 あだふね
 能ふーべき
 与ふる
 あたふれーど
 与ふれーば
 与へ
 与へかねーつる
 与へーき
 与へくれーし
 与へーけり
 与へーける

三 三 一 三 一 一〇 四 一 二〇 一 三 九 五 一 四 一

〃 〃 七 〃 六 〃 五 四 〃 〃 三 〃 三 〃 三 元 六

頭③	頭②	頭①	仇ぼめ	与へんーや	同 (連体形)	与へーん(終止形)	あたへをる	与へ居る	与へろ	与へる	与へられーつ	与へられーたる	あたへられーたら	与へられーた	あたへられーずーや	与へられーずーば
一	九五	四四〇	二	一	一	五	一	三	一	二	一	六	一	一	一	一
一〇三	五五	〃	〃	〃	〃	〃	五	〃	〃	〃	五	〃	〃	〃	五	五

仇み	熱海	あたまたかち	頭越し	仇まくら	頭がちなる	頭がちなり	頭かたち	頭数	頭打ち	頭⑩	頭⑨	頭⑧	頭⑦	頭⑥	頭⑤	頭④
一	三七	一	一	一	三	一	一	一	一	一	一六	二一	二	二八	二一	一
一七	二四	〃	〃	〃	二三	〃	〃	〃	〃	二三	二〇	〃	一八	一五	〃	一〇三

三 二 一 二 一 一 四 一 一 六 一 一 二 一 二 一 二
三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三

九 一 一 一 一 一 五 三 七 二 一 一 一 一 一 一

八 一 一 一 一 一 五 三 五 二 七 一 一 一 一 一 一

〃 〃 〃 一四 〃 〃 一四 一四 〃 一四 一五 〃 〃 〃 〃 〃 一四

新しき土	一	二三
新しく	三〇五	二三
新しけれ―ば	二	二五
新しさ	二一	二五
新しすぎる	一	二五
新しの	一	〃
あたらしみ―つつ	一	〃
あたらしむ	三	〃
あたらし―ず①	三	二五
あたらし―ず②	一	〃
あたらし―ず③	二	〃
あたらし―ず④	二	二五
あたらし―ず⑤	一	〃
あたらし―ず―て	一	〃
あたらし―ず―なり―し	一	二五
あたらし―ず―なれ―ば	一	〃
あたらせ―て	一	〃

あたらせ―に―けり	一	二三
当ら―ない	一	〃
あたかなる	一	二五
あたらし―ぬ①	八	〃
あたらし―ぬ②	一	二五
あたらし―ぬ③	一	〃
あたらし―ぬ④	一	〃
あたらし―ぬ⑤	一	〃
あたらし―ぬ―らしき	一	二五
あたらし―ね―ど	一	〃
あたらし―ね―ば	四	〃
あたらの	一	〃
当ら―ば	二	二五
当ら―む①	二	〃
あたらし―む②	一	〃
良夜(あたらしよ)	五	二五
あたらせ	二	〃

合計	あたり⑩	あたり⑨	あたり⑧	あたり⑦	あたり⑥	あたり⑤	あたり④	あたり③	当り②	当り①	当らん
----	------	------	------	------	------	------	------	------	-----	-----	-----

三、

三 九 四	五 七 六	一	一	一	一	一 五	四	四 八	四	八	一
-------------	-------------	---	---	---	---	--------	---	--------	---	---	---

〃	〃	二 六	〃	二 五	二 四	二 三	〃	二 五	二 五	二 五
---	---	--------	---	--------	--------	--------	---	--------	--------	--------

あだたらおろし【名詞】〔あだたら風〕

みちのくのあだたら風朝夕に疎開の孫を吹きて居るらむ③

小杉放庵

あだたらのやま【名詞】〔あだたらの山〕

あだたらの山の麓の村にして妹が家の遅桜かな②

小杉放庵

つばらかに山の巖のみ雪はれて朝あかるき安達太郎の山②

大谷谷泉

日の照れば照るにさびしき姿なる岩代の国あだたらの山①

小杉放庵

あだたらまゆみ【名詞】〔あだたら真弓〕

引すてしあだたら真弓弦はげて老のすさびに力ためさむ

海上胤平

あだたらまわた【名詞】〔あだたらまわた〕

みちのくのあだたら真綿肌につけ寒きゆふべは君し思ほゆ①

正岡子規

あだたらやま【名詞】〔安達太郎山〕

朝あけて清きひかりの差しそひし安達太郎山に雪真白なり②

堀内通孝

あだたらおろし

あだたらやま

青み立つ田のものなかの村のをち安達太良山はゆゆし雲湧く
いささかの鎖にすがり岩づたふ安達太良山の乳首のあたま②
おしなべて刈田に沿へる街道に安達太良山の隠るる隈あり

風吹けば代搔く脛や寒からむ安達太良山に残る雪多し②

早苗田のみのものにうつる梅雨空は安達太良山に雲こもり見ゆ

裾ひろく左窓に移る秋やまを安達太良山と名は旧く知る

みちのくのあだたら山に紫の名知らぬ花をあはれとは見つ⑤

みちのくの安達太良山の麓とふわが行く日なき村しおもほゆ⑥

あだち【名詞】〔足立〕

安立山の略、福岡県にあり。

晴れし日は赤き若戸の橋が見え果てに足立の雪の山見ゆ⑦

あだちがはら【名詞】〔安達が原〕

依田 秋圃

中西 悟堂

植松 寿樹

小杉 放庵

依田 秋圃

植松 寿樹

佐佐木 信綱

加藤 淘綾

安斎 哲夫

福島県安達郡に安達が原の黒塚の址と称するものあり、古の鬼の窟と伝えらる。

〔歌碑〕——みちのくの安達が原の黒塚に鬼こもれりと聞くはまことか（平兼盛）

鬼のすむ安達が原も君が代はくるまの上に寝て過ぎにけり

落合直文

大海へ川音川の出でて行く安達が原のしら絲のみち²¹

與謝野晶子

みちのくの安達が原の黒塚の古杉森は夕霞みせり²²

小杉放庵

みちのくの安達が原の二本松松の根かたに人たてる見ゆ

高村光太郎

みちのくの安達が原のふるごとの鬼の話も聞き覚え来よ²³

小杉放庵

あだちのやま【名詞】〔足立の山〕

福島県小倉市の東南にある山、海拔六〇〇米。

渡り来る鳥ら足立の山越えて二分れしてゆくとき光る²⁴

香取空

あだちひめ【名詞】〔足立姫〕

足立姫が沈みし洲はいづこかも荷足の船が汐に乗りをり²⁵

尾山篤二郎

あだちかはら

あだちむらやま

あだちむらやま【名詞】〔足立群山〕

立ち並ぶ足立群山朝の日がさし輝けば生けるごとしも

毛利一雨樓

あだちめのこ【名詞】〔安達めの子〕

みちのくの春の夕はうそ寒し安達めの子よ風呂の下焚け②

小杉放庵

あたつくに【名詞】〔あたつ国〕

あたつ国蒙古の使時もおかずはや打ち斬れとたけびけむかも

伊藤左千夫

あたっ―て【動詞・助詞】

口語ラ行四段活用「あたる」の連用形「あたり」の促音便

ありったけの銭をさらって買った炭その炭火にあたって雨を聞いてゐる③ 花岡 謙二

風草は風に吹かれそよいでゐた。ただそれだけだ。日があたってゐた③ 矢代 東村

尖った島の頭に日があたって、雨あとの風が青い重油を流すのだ⑨ 前田 夕暮

飛行機製作所の白い建物があり、白菜畠があり、いづれにも日があたってゐる⑪

前田 夕暮

落の葉に日があたってゐる裏口から、村人らしく言葉をかけてとほる⑨前田 夕暮

ものおもひ捨てて出てゆく霜の道焚火にあたって人のゐる道④ 西村 陽吉

あたっ—てる【動詞・助動詞】

絞首台へゆく一本の枯芝道 ただ、事もなく日があたってる③ 矢代 東村

古風な紙の障子にまだ寒い、春のはじめの日があたってる。③ 矢代 東村

紺碧の海をうしろにかけあがる 日があたってる暮鳥の家だ 花岡 謙二

向うの切りくづし崖の黄の壁に陽があたってる菜畑も見えて 北原 白秋

あだと【形容動詞】「婀娜と」

タリ活用「婀娜たり」の連用形。「謡、卒都婆小町」】翡翠のかんざしは婀娜と

たをやかにして、楊柳の春の風に靡くが如し

華容婀娜として芳藹^{はうあい}たる朱唇はころび来り忽焉たりや牡丹と嬌^を嬌^{とめ}⑨ 尾山 篤二郎

あたって

あだども

あだども【名詞】〔敵共〕

あだどものよせくと見しは夢にしてさむる枕にくつわ虫なく

落合直文

敵共はあさけの沼の立ち鴨の浮き足立ちぬ今ぞ打ちてむ③

小杉放庵

あだな【名詞】〔渾名〕〔綽名〕〔仇名〕

白髪頭振り振り教ふる癖がそも渾名の出所と吾子にきかさる

越川幸一

先生に付けし綽名など言ひいでて老いし同窓生散会しかねつ①

立花馨

禿々と客に仇名を呼ばれても かの芸人は 笑って礼を云ふ①

後藤史郎

飛行船とあだなつけたる胴太の蛾が飛び込んで今夜もひとあばれす①

竹添履信

わかき日のあだ名にてわれは呼ばれをり久しぶりのこの新鮮なる感じ

平中歳子

あだなさけ【名詞】〔仇なさけ〕〔仇情〕

仇なさけいとどつれなさまさるらむいとどわが恋冬に入るらむ②

吉井勇

仇なさけ薄なさけなど知るゆゑに小鶴かなしくうつくしきかな⑨

吉井勇

仇情うす情にも感ずるとわれやわりなく涙ながすも③

吉井 勇

仇びとをあはれとぞ思ふ仇なさけ仇しごころの君と知らねば⑧

吉井 勇

うつくしき里千代ならばかりそめの仇情さへうれしからまし⑦

吉井 勇

京に来てはじめて知りし仇情などと文書く置きて来し子に^き

吉井 勇

京を見ただ恨むのみのこる京仇なさけのみのこる京かな⑫

吉井 勇

はしけやし里千代は言ふかりそめの仇情さへうれしからむと

吉井 勇

ひとり寝もいたづら臥も仇し寝もみなかの君の仇なさけゆゑ⑤

吉井 勇

深なさけ仇なさけより少しよし薄なさけには及びがたかり⑥

吉井 勇

文丸はいたいけなれば仇情薄情などをしへたまふな⑦

吉井 勇

あだなしーて【動詞・助詞】「あだ名して」

サ行変格活用「あだなす」の連用形

あだ名してカルメンと呼ぶたをやめの帽子の針を怖れけるかな

堀口 大學

あだなさけ